

いつだって好奇心 手を伸ばせばそこに本

子どもの読書活動

学校・園の取り組みを紹介します③

☎社会教育課 ☎・☎(582)1142 ☎(581)2733

吉身幼稚園

「“わくわく” “どんだん”おはなし会! ～絵本との出会いをとおして～」

毎月1回「おはなし会」と称して、地域のボランティアの皆さまに各学級で絵本や紙芝居などのおはなしの読み聞かせをしていただいています。「たくさんの絵本に出会うこと」「人に出会い、ともに時間を過ごすこと」「心地よい語り(読み聞かせ)を聞くこと」などを目的とした、大事にしている時間のひとつです。



“わくわく”楽しみにする気持ちや“どんだん”絵本に出会いたくなる気持ちを大切に、地域の皆さまとのふれあいや絵本の読み聞かせを通して、絵本が好きな子どもと豊かな心を育てていきたいと思ひます。

若鮎保育園

「お話の世界を楽しむ子どもたち」

乳児にはいろいろな種類の絵本とたくさん出会うよりも、数冊の絵本を繰り返し読むことでその絵本をじっくりと楽しめるようにしています。子どもたちは絵本の世界が体に染み込んでいて、



絵本を開くと簡単なフレーズが出てくることもあります。単純なやりとりの繰り返しですが、子どもたちの心の中に心地よく響いていくように感じます。好きなページが近づくと子どもの表情が変わり、「まだかな」と楽しみにしている様子が一緒に読んでいて伝わってきます。これからも、絵本の世界を楽しめるようにしていきたいと思ひます。



佐川美術館
アートコラム②

手捏ねと轆轤制作

公益財団法人佐川美術館
学芸員：松山早紀子



桃山時代に樂茶碗を造り出した初代長次郎以来、轆轤や型を用いず手捏ねで形成し、篋で削り上げて形を造り、屋内の小規模な窯で焼き上げられてきた樂焼の技法は、他に類のない独特なものです。初代長次郎より450年、一子相伝(秘伝を親が子ども一人にだけ伝える)で伝わってきた樂焼は、各代が長次郎を意識しながらも自らの表現を追求し、伝統と創造を極めてきました。特に十五代樂吉左衛門・直入は、赤樂茶碗、黒樂茶碗といった伝統的な技法のほかに、特殊な焼貫技法を駆使した、これまでにない斬新かつモダンな造形の茶碗や茶入を制作するなど、独自の世界を築いてきました。

近年、萩に赴き萩焼を焼いたのを機に、轆轤の魅力にとりつかれ、轆轤の茶碗を制作しました。轆轤の回転する遠心力にそって、内から外へ広がる開放的な井戸形が特色の轆轤の茶碗は、外から内に向かって抱え込むように形を結んでいる樂茶碗の手捏ね制作とは対照的といえます。

現在、佐川美術館の樂吉左衛門館では、手捏ねの技と轆轤の技、相反する技によって制作された茶碗を対峙させています。外に広がっている形をしており、轆轤目(轆轤を回転させて周回条につけられる痕)が見えるのが轆轤の茶碗です。この機会に、異なる技法で制作された茶碗をぜひ見比べてください。